

『紐鏡』再考

赤峯, 裕子
純真女子短期大学講師 (非常勤)

<https://doi.org/10.15017/11969>

出版情報 : 語文研究. 63, pp.51-62, 1987-06-03. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

『紐鏡』再考

赤 峯 裕 子

飛躍した、奇蹟であり、謎であった。しかし、宣長といへども、はじめはやはり旧来のてにをを説の中に育ったのである。その彼がいかにして比較的短期間のうちに高度な研究にまで到達したのか。これは宣長の学問形成の問題であると共に、広く国語学史の上でも重要な課題である。

本居宣長の語学に関する業績のうち、係り結びの法則を中心とする文法研究については、これまでも幾多の論考があり、その実態はかなり明らかにされてきている。しかし、依然として資料不足などから、今だに解明されていない点もある。その一つが、『てにをは紐鏡』（以下『紐鏡』と略す）及び『詞の玉緒』に示された、係り結びの法則を、宣長がどのような過程をたどって体系的に理解し把握するに到ったのか、という点である。尾崎知光氏は『本居宣長の初期てにをを研究への道程』の中で次のように述べている。

本居宣長の国語学に関する業績のうち、最も大きなものは、『詞の玉緒』『紐鏡』に代表されるてにをを研究であることは、誰しも異論のないところであろう。(中略)しかし従来の国語学史をたどるかぎり、宣長の研究はまことに突然変異的であり、それまでの旧派てにをを研究の幼稚な段階から一気に完成へと

そうして、この論文で、宣長が中世以来の歌学的なてにをを説を基として、数多くの例証にあたって整備していった結果得られたのであろう、と結論づけている。宣長が宝暦年間に、『てには口伝』や『手爾波大概抄』を筆写している事実を指摘し、『尾花が本』（宝暦三年記）、『在京日記』（宝暦七年記）などには係り結びの法則に誤りがあるが、帰郷後にはそうした誤りが殆んどなくなっていることを綿密な調査で実証している。さらに、帰郷の前後に著された『排齋小船』の中の「テニハ」についての記述から、この時期の宣長は係り結びの法則に習熟し自ら誤って用いることはなかったが、それは旧来のてにををを学書を参考として独自に古典の学習から経験的に得られた結果であって、決して『紐鏡』『詞の玉緒』に示したような法

則としての体系的な理解ではなかった、というのである。

尾崎氏は『詞の玉緒稿』と称せられる資料の調査なども合わせて、宣長の「てにをは」研究は実は中世以来の歌学の伝統を継承し、体系だてるといふ性格を持っていた、とする。つまり、宣長の体系つけた係り結びの法則も、全く何も無いところから宣長が一人で発見したのではなく、それまでに積み重ねられてきた歌学的な「てにをは」書の成果を充分に利用して、完成させたというわけである。

前に引用した中で尾崎氏が「突然変異的」で、「一気に完成へと飛躍した、奇蹟であり、謎であった」とする宣長の結び結びの法則に關する研究が、零から出発したものではなく、不備な点が多いとはいえ、問題点を指摘し問題解決の糸口を与えた従来の「てにをは」書の記述から出発したことは、尾崎氏の指摘の通りであろう。しかし、それだけのことであろうか。係り結びの法則の研究、即ち『紐鏡』や『詞の玉緒』の成立過程に影響を与えたものが、「中世的思考」だけなのであろうか。中世以来の伝統ののりとして研究を押し進めるだけでは、こうした飛躍的な完成へ到達することはできなかったのではあるまいか。殊に、『紐鏡』が一枚の図表である点を考えると、何か別の要素がそこに深く関わっているように思えてならないのである。以下、この問題に対する私なりの考えを述べてみたいと思う。

二

ここでまず『排蘆八船』の「テニハ」についての記述を引いてみよう。

コトニ和歌ハ、言語ヲ文美ニツ、ルモノナレハ、ワキテテニハヲエラヒツ、シムヘキ事ナルニ、近來ノ歌ヲ見ルニ、テニハノカナハザル歌ハナハダ多シ、初心ノ人ハ言ニ及ハズ、歴々ノ歌人ノ詠ニモ、テニハノカナハ又事多シ、コレイカニトナレハ、古雅言ヲヨクく會得シテ、歌詞トクト我物ニナラザルユヘ也、平生ノ俗言ハ、幼稚ノ時ヨリ自然ニナラヒ得テ、我物ニナリタルユヘニ、カリニモテニハノカナハ又ト云事ハナシ、モシ古雅言モヨクヨクナラヒ得テ、我物ニナリタラバ、テニハノカナハ又ト云事ハ、自然トナキハツ也、(中略) 大カタ一首ノウチ、一ツモテニハカナハサル所アレハ、其歌イカニ秀逸トイヘトモ、トルニタラサル也、サレハ先達モコレヲ重クヲシヘ玉ヒテ、其書又多シ、サレトモソノ大概ハ、書モシルスヘケレトモ、クハシキ事ハ書記シカタシ、言語ト云モノイク千萬トモカキリナキモノナレハ、コトく記シヲシフル事アタハズ、只テニハハ古歌ヲヨクく見ナラヒヨミナラヒテ、自然ト雅言ノ我物ニナルニシタカヒテ、ヨノツカラ解スルモノ也、教フルニ詞ナク、書ニヨシナシ、自然ト功ヲツミテ、ミツカラサトルヘキ也、今ノ世、テニハ傳授ト云事モアレトモ、コレモソノ大概ニテ、ナカくテニハ傳授ヲシタレバトテ、コトくテニハノサトル、物ニモアラス、サレハ傳授シタル人ノ歌ニモ、テニハノカナハ又事多シ、又必シモ傳授セネトモ、古言ヲヨクく心得テ、我モノニナレハ、テニハハ自然ト知ル、事也、(後略)

ここで披歴されている宣長の「テニハ」観は、『詞の玉緒』のそれと比べ、大きな違いがある。『詞の玉緒』では次のように言つ。

○てにをはは。神代よりおのづから萬のことはにそなはりて。その本末をかなへあはするさだまりなん有て。あがれる世はさらにもいはず。中昔のほどまでも。おのづからよくとゝのひて。たがへるふしはをさく／＼なかりけるを。世くだりては。歌にもさらぬ詞にも。このとゝのへをあやまりて。本末もてひがむるたぐひのみおほかるゆゑに。おのれ今此書をかきあらはせるは。そのさだまりをつぶさにをしへさとさんとてなり。

(一之巻)

『排廬小船』と『詞の玉緒』における「テニハ」観の違いはまさにこの一点、「言語ト云モノイク千萬トモカキリナキモノナレハ、コト／＼ク記シラシフル事アタハズ」と、「おのれ今此書をかきあらはせるは。そのさだまり「私注申てにをはのおのづからことばにそなはりて。その本と末をかなへあはするさだまり」をつぶさにをしへさとさんとてなり。」という言及に、端的に示されている。

前に引いた尾崎氏の論文に指摘がある通り、『排廬小船』を著した頃の宣長は、個人的には『てには口伝』や『手爾波大概抄』等の中世歌学の伝統を引くてにをは書の学習や、古典の習熟によって係り結びの法則を身につけていたことは明らかである。しかし、個人的経験的に身につけた係り結びの法則を、他の人に教えるほど体系づけることができている状態であった。それは、宣長の研究の一つの段階として考えることができよう。その段階では、係り結びの法則はどのように頭の中におさめられていたのか、宣長以前のてにをは文法において最高の内容を持つと言われる『氏邇乎波義憤抄』などの記述から、その状態を推測してみることは可能であるかもしれ

ない。

之はいひなかず氏邇乎波なり。曾といふへきを波とおさゆるとき、幾ととまるへき歌の之となる也。(中略)過去の之といふ事あり。あまた有ものゆる盡しかたし。今一つ二つを出す。餘はなすらへて知へし。(中略)現在の之といふあり。當意をいふとて白雲には打かはしの歌をひける物あり。さらはずにかよふしなるにやおほつかなし。又侘し悲し嬉しこれらをもいふとあれと、悲し嬉しの之はてにをはにあらす。可の字へくともへしともよむ如く躰なり。侘しの之はわひしきの下略なるへし。侘しらになともよめり。今こゝに出すは濁音の須にかよふ之なり。

(歌例略)

やすめたる之あり。是もあまた有。いさゝか出す。

(『氏邇乎波義憤抄』)

『氏邇乎波義憤抄』は、一字毎の文字項目を立て、その文字によってあらわされるてにをはに関すること全てを列挙するという体裁をとっている。従って、「之」の項には、助動詞の「き」の連体形も、動詞の活用語尾の「し」も、打消推量の「じ」も、助詞の「し」も含まれているのである。『春樹頭秘増抄』にも「第三十五 ○しもの事」として、およそ「し」と書きあらわされる場合について記す。「し」と表記されるものの分類別は「過去の之、濁音の須にかよふ之、やすめたる之」などである。『氏邇乎波義憤抄』も「春樹頭秘増抄」も体裁は同じで、しかも、てにをはに関することは全てを記そうとする姿勢までも、大同小異のように感じられる。『紐鏡』

『詞の玉緒』の整然とした、一つの視点によって貫れた記述内容と比べると、とりとめがなくまとまりに欠けているといった印象を受ける。中世以来蓄積したてにをはの知識を細大もらさず示そうとした結果と考えるならば、これを体系的にまとめるために必要な何ものかを把握していなかった宣長が、「言語ト云モノイク千萬トモカキリナキモノナレハ、コトクク記シヨシフル事アタハズ」という気持ちになったのも無理からぬことであつたかもしれない。

宣長は「てにをは」の根本性質を、「おのづからことばにそなはりて。その本と末をかなへあはするさだまり」にあると考えた。この「さだまり」が、今所謂係り結びの法則であり、宣長は、てにをはの最も重要な原理と考えた係り結びの法則を取り上げ、それを中心として「てにをは」を記述することを『詞の玉緒』の最大の目標としたのである。宣長は、てにをはについて、自分なりの見識を持っていた。その見識に基いて、てにをはの研究を行なつた点に、従来の歌学的なてにをはを学説とは一味も二味も違う、画期的なものをうち立てることができた原因があるのではなからぬと思われる。即ち、宣長は単なる文法学者にとどまらず、偉大な国学者であつたということである。

宣長以前のてにをはが、てにをはの知識を網羅しただけに終つていたのに対し、『紐鏡』『詞の玉緒』では、係り結びの法則を体系的に呈示することを眼目としている。何故係り結びの法則に注目したのであるか。

「てにをは」は漢文の助字のようなものだという説に反論して宣長は次のように言う。「一向ニ助字ナクテモ、文章ハキコユル也、ヒツキヤウ助字ハ、文章ノ餘勢ノヤウナルモノ也、(略)テニハヲ漢

文ニタトヘテイハバ、テニハノタガヘル詞ハ、漢文ニ展倒ノアルト同シ事也、(略)一ツモ展倒アル時ハ、文ヲナサス、」(『排蘆小船』、「かのからぶみの助字といふなる物は。その本と末とをあひてらして。かなへあはするさだまりはなきものなるを。てにをはは。たしかに此さだまりのあと有て。」(『詞の玉緒』)。つまり、「てにをはの本末あはするさだまり」とは、漢文の語序に相当する、それが整わなければ文をなさない重要なものだと思つていたのである。

この点に留意して、時枝誠記氏は「宣長は、てにをはに文を統一體たらしめる重要な機能を認めようとしたのである。」と『国語学史』の中で述べている。しかし、宣長が係り結びの法則を重視したのは別の理由であると思われる。それは、「てにをは」が古言ではよく整つていたのに、時代が下がるにつれて乱れ、「さだまり」をわきまえる人も少なくなつたことだと思われる。

宣長が古言を至上のものとしたことは周知のことである。そうした国学者としての思想とも関わって、「てにをはの」とのへは。その本末をかなへあわせて。いにしへのさだまりをあやまたぬをなんむねとはすめれば『詞の玉緒』。』という言葉に示されている理由で、係り結びの法則を重視し、『紐鏡』や『詞の玉緒』を著したのである。

前時代とは一線を画する独自のてにをは観のみならず、文法的にみても宣長が優れた整理を行っていることも確かである。先に、『氏邇乎波義慣鈔』『春樹顯秘増抄』の例を示したように、それらにおいても、係りとの結びの「一対一」の対応については、「曾一幾」「波一之」(義慣鈔)など、かなり正確に把握されていた。問題は、「幾」とまゐるは計利反幾にて、けりとおなし氏爾乎波なり。」(同前)として、

「き」「けり」が過去の助動詞とはいえ、語の認定を誤まっている点である。このことは、これらの書が係り結びの法則の最も単純な対応を把握しているにすぎないことを示している。

それに対して『紐鏡』では、同じ結びをとる係りの語の関係、係りによって変化する同じ結びの語の活用形の間を、係りと結びの対応関係と同時に、縦横の総合図の中で明らかにした。つまり、係り結びの法則を体系的に把握していると言われるのはこの点に拠るのである。

一つ一つの係り結びの正確な理解がこうした総合図表を完成させる基礎となったことは間違いない。『詞の玉緒』に掲げられた三転証歌は、それを裏付けるための徹底的な調査の過程を示すものである。しかし、調査によって得られた一々の係り結びを列挙するだけならば、以前のにををは書と『紐鏡』との間の差はさほど感じられなかったであろう。やはり、宣長が把握した係り結びの法則の体系を一目瞭然の形で図表にして記したところにその卓越したものが感じられるのである。

例えば、『紐鏡』では、「はーき」「もーき」「徒ーき」「ぞーし」「のーし」「やーし」「何ーし」「こそーしか」という係りと「し」「徒」を「類」とし、「し」を要求する「ぞ」「の」「や」「何」を「類」とし、「しか」を要求する「こそ」を「類」として、「し」という一つの助動詞が活用することを認識し、形は「き・し・しか」と変化しても同じ語であることを認識し、形は「き・し・しか」と変化しても同様で、「は」「も」「徒」の結び、「ぞ」「の」「や」「何」の結び、「こそ」の結びと、各々が対応することをあらわす表となっている。

『紐鏡』の獨創性は、ち密な、縦横の組み立てのしっぺりした総合図表だということにあらわれているのではあるまいか。そう考えたとき、宣長がこうした図表を「中世的思考」だけに影響を受けて考えついたとは考えられないように思われる。

てにををの説明に用いられる伝統的な図表に五十音図がある。『手似葉大概抄』にも、「こそはエケセテネの通音、ぞはウクスツヌの通音」というような記述がある。近世に入って、動詞の活用研究に、五十音図を用いるようになっていた。もしも、宣長が「中世的思考」にのっとっていたならば、先ず何よりも五十音図を利用したのではないだろうか。しかし、宣長は五十音図を利用しなかった。そこで改めて考えてみたい。宣長は他のいかなる影響のもとに、『紐鏡』の図表を考えついたのであろうか。

三

ここで一つ注意しなければならないのは、係り結びの法則についての研究をすすめていた、頂度同じ頃に、宣長は漢字音の研究も行っていったという点である。この間の事情については、『本居宣長全集（筑摩書房）第五巻の、大野普氏の解題に詳しい。

では、宣長はいかなる動機でこの二つの研究に足を踏み入れたのか。そのことを推測するために、筆者はまずこの二つの研究が何時頃成就したものかを考えたい。そこでまず、出版をもつて研究の成就の時と見なせば、『詞の玉緒』『漢字三音考』の二著は、共に天明五年（一七八五）の刊行である。當年として宣

長は五十六歳、まさに圓熟期に達しての著作というべきかもしれない。しかし、『字音假字用格』は、それに先立つこと九年の、安永五年（一七七六）の刊行で、宣長は四十七歳である。ところが、宣長は、それに先立つ十五年、寶曆十一年（一七六一）五月、三十二歳にして、『字音假字用格』の初稿らしい浄書本を作り上げている。してみると、漢字音に關する研究は、かなり早い時期から進行していたこととなる。

また、安永を溯る明和八年（一七七二）二月、谷川十清が本居宣長に送つた書簡の中に、宣長の「字音かな遣ひ」という著作が、まことに立派な出来榮えであると賞讃した箇所がある。これによれば、明和八年には『字音假字用格』は成稿に至っていた。また同じ頃と推定される谷川十清の書簡に、「漢音呉音辨、面白事に候也」とある。ここにいう「漢音呉音辨」とは、『漢字三音考』の初期の名稱であろうと推定される。従つて、宣長の漢字音研究は、安永の中頃よりもさらに溯る明和八年までに、すでに人に示し得るほどにその中心的部分は成立していたことになる。

なお、明和八年五月七日の谷川十清の書簡には、「ひも鏡之御印刻拜見仕候、古今獨歩之御見識と奉信仰候」とある。「ひも鏡」とは『てにををは紐鏡』であつて、これは『詞の玉緒』の内容と照應する、係り詞と活用形との呼應の一覽表である。従つて『てにををは紐鏡』が刊行されたということは、『詞の玉緒』のうちの、『てにををは紐鏡』と内容の照應する部分、すなわち、少なくとも一の巻の「三轉證歌」などの、形式的な對應を示す部分は、すでに成就していたことを示している。これによ

れば、明和八年までに、宣長の語學の二大業績である、係り結びの法則と、漢字音の研究との中心は、すでに成立していた。そして、漢字音の研究では、宣長は文雄の成果をよく取り入れていることを指摘する。

この宣長の漢字音に關する研究の遂行には、僧文雄の先行する著書から、宣長の吸収した所が大きい。すでに述べたように、寶曆元年の『かなつかひ』の欄外に、僧文雄の『和字大觀抄』による書き込みがある。また、『本居宣長隨筆』（本全集第十三卷所収）のうち、京都遊學中に成つたと見られる第三巻にも、『和字大觀抄』からの抄出がある。僧文雄の研究は當時の字音研究の最新の成果であつた。（中略）

その僧文雄の韻學の特徴は、當時のシナ音の知識によつて、古來日本に傳わっている『韻鏡』の内容を解釋した所にある。『韻鏡』とは、唐宋末初にシナで制作された漢字の音韻表四十三枚の冊子である。しかしはやくシナでは亡逸して、日本にだけ残存した。これはシナの音韻を整理した圖表であるから、シナ語の音韻の研究には、便利な圖表のはずである。ところが平安時代に日本語では六十七の音節を言い分けるにすぎなかつたのに、唐代のシナ語の發音は三千七百以上の音節の區別を持ち、それを『韻鏡』はことごとく圖表に収めている。従つてそのシナ音の區別を日本語の假名によつて正確に認識し分けることは、日本人には極めて困難な作業となる。それに對して、僧文雄は、唐音の知識を活用して、かなりよくその圖表を解釋し

た。つまり僧文雄の所論は、その點で當時として新鮮な、高い價值に輝く業績であつた。それは『磨光韻鏡』によつて世に廣められた。また同じ著者は、『和字大觀抄』では、さらに日本の文字や、日本における漢字の字音までも概説した。また『三音正譌』を寶曆二年（一七五二）に著して、吳音、漢音、唐音について論じ、漢字の發音を假名で説明した。宣長はこの、當時最新の研究に鋭く、關心を寄せた。それ故、宣長の漢字音研究が本格化した際、僧文雄の與えた影響は極めて大きいのである。

今日の観点からすれば、宣長は文法と音韻の各々の分野で業績を上げたとされる。しかし、こうした區別は近代以降の西洋言語学に基く発想である。果して宣長に、音韻についての研究、文法についての研究といった區別は存在したであろうか。

係り結びの法則と、漢字音の研究を同時期に精力的に行なつていたといふ点からしても、各々が全く別の分野のものとして厳密にとらえられていたとは考えにくく、両方の研究を始めざるを得なかつた、宣長の内部にある必然性も一つではなかつたのか。漢字音研究の著作に、次のような記述がある。

殊二人ノ聲音言語ノ正シク美キコト。亦復二萬國ニ優テ。其音清朗トキヨクアザヤカニシテ。譬ヘバイトヨク晴タル天ヲ日中ニ仰ギ瞻ルガ如ク。イサ、カモ曇リナク。又單直ニシテ迂曲レル事無クシテ。眞ニ天地間ノ純粹正雅ノ音也。サテ其古言ノ正音ハタゞ四十七ニシテヤノ行ノイ。エト。ワノ行ノウトヲ加

フレバ。都テ五十ナリ。(中略)サテ其五十ノ音ヘ。縦ニ五ツ横ニ十ツ、相連リテ、各縦横音韻調ヒテ亂ル、事ナク。其音清朗ナルガ故ニ。イサ、カモ相涉リマガラハシキ事モナク。一一ノ音ニ平上去ノ三聲ヲ具シテ。言ニ隨テ轉用ス。

（『漢字三音考』皇國ノ正音）

皇國ノ古言ハ五十ノ音ヲ出ズ。是天地ノ純粹正雅ノ音ノミヲ用ヒテ。濁雜不正ノ音ヲ厠ヘザルガ故也。サテ如此ク用ル音ハ甚少ケレドモ。彼此相連ネテ活用スル故ニ。幾千萬ノ言語ヲ成ストイヘドモ。足ザル事ナク盡ル事ナシ。ソノウヘ一言ノウヘニモ亦活用アリテ。假令バ言思ノ如キハ。ハ。ヒ。ガ。ヘ。ト轉用シテ。イハム。イヒ。イフ。イヘ。オモハム。オモヒ。オモフ。オモヘ。ト活キ。往還ノ如キハ。往ハ。カ。キ。ク。ケ。選ハ。ラ。リ。ル。レ。ト轉用シテ。ユカム。ユキ。ユク。ユケ。カヘラム。カヘリ。カヘル。カヘレ。ト活ク。諸ノ言皆此格ニテ。第一音【アカサタナハマヤラワ】ハ未然ラザルニ用ヒ。第二ノ音【イキシチニヒミイリキ】ハ方ニ然ルヲ下ヘ云オクルニ用ヒ。第三音【ウクスツヌフムルウ】ハ方ニ然ルヲ云サダムルニ用ヒ。第四音【エケセテネヘメエレエ】ハ然セヨト令スルニ用フ。【又上ニコソノ辭アルトキハ。第三ノ音ト同意ニナルリ。】タゞ第五音【オコソトノホモヨロヲ】ノミハ。如此クナル活用ノ例ナシ。又上件ノ外ニモ種々ノ活用アリテ。千言萬言各皆其例格違フコトナシ。又言ヲ連ネテ語ヲナスニ。ハ。モ。ゾ。コソ。テ。ニ。ヲ。ヤ。カ。ム。等ノ辭アリテ其意ヲ分ツ。凡テ如此ク。活用助辭ニ因テ。其義細ニクハシク分ル、事甚妙

ニシテ。外國ノ言語ノ能及ブ所ニ非ズ。凡ソ天地ノ間ニ。カク
バカリ言語ノ精微ナル國ハアラジトゾ思ハル。

(同前・皇國言語ノ事)

漢國ハ字甚多クシテ。煩ハシククダクシク返テ不便也。(中
略)サテ又字ハ多キ故ニ。目ニコレヲ視レバ義理ヨク分ルレド
モ。字ノ多キニ比スレバ。音ハイト少クテ。一音ニ數字數言ヲ
兼ル故ニ。耳ニ其言ヲ聽テハ。義ノ分ラヌコトツネニ多シ。又
音即言ナルガ故ニ言ニ活用ナシ。其例ヲイハバ。飲食ノ如キ。
皇國言ニテハ。ノム。クラフ。トモ。ノママ。クラハム。トモ
ノメ。クラヘ。トモ活キテ。其義ヲ分ツヲ。漢國ニテハタダ
飲食ト云ヨリ外ナクシテ。活カザル故ニ。(中略)ノム。クラフ
モ。ノママ。クラハム。モ。ノメ。クラヘ。モ。一ツニシテ
差別ナシ。タダ其時ノサマト。上下ノ言トニ随ヒテ意得分ルノミ
ニコソアレ。其一言ノウヘニテハ分リ難シ。諸ノ言語皆然也。
(中略)サテ皇國ノ音ハ。タダ五十二ニシテ甚少ケレドモ。正音
全備シテ闕タル者ナシ。漢國ノ音ハ。コレニ比スレバ甚多ケレ
ドモ。タダミダリニ駁雜ニシテ全備セズ。闕タル音多シ。

(同前・「漢國字多キニ過テ音足ザル事」)

『漢字三音考』に示されている宣長の見解は、日本語は五十音と
いう正音を全備していること、正音は五十音で中国の音の数よりは
はるかに少ないものの、言葉としては互いに続いた場合には活用や
助辞のはたらきによって意味の区別は明白、かつ、容易ということ
である。

語の活用も係り結びの法則も、文法という別の分野の問題ではな
く、日本語の音の数が五十で完全であることと同様、日本の言語の
精妙さを示す特徴の一つなのである。ことに活用は五十音の行に
よって分類整理可能であるために、一層音韻の面と関連づけて考え
ている。「皇國言語ノ事」では、四段活用を例にとり、行ばかりでな
く段の違いとその活用形の意味の違いについて述べていることは、
先に見てきた通りである。

字音の研究と係り結びの研究は、現在の観点からすれば、音韻と
文法という異なる分野に属する。しかし、宣長にそうした区別があ
る筈はなく、これまで見てきたように、同じ日本の古言の精妙さを
具現した特徴として捉えられている。宣長の言語観、国語観は、当
然乍ら、国学者としての彼の思想とかわる問題であるが、ここで
はその問題について語ることは目的ではない。

繰り返して言うが、宣長は漢字音の研究と係り結びの研究を、
各々別の分野のものとして一線を画して研究していたのではない。
ともに、日本の言語に関するものであり、両者を区別すべき理由は
なかった。漢字音研究で用いた方法や理論を係り結びの研究に用い
ることもできたのである。しかも、両研究は同じころ、平行してな
されていたことを考えると、互いに何も影響を与えなかったとは考
えられないところである。

その影響関係を最も明らかにしているのが『紐鏡』と『韻鏡』で
はないか、と思う。題や用語はもとより、結びの段数が四十三段で
あるという構成も、そして最も重要な点は、『韻鏡』もまた縦横相互
の関連を結構とする図表だ、ということである。頭子音別の縦の区
画はさらに清濁によって分けられ、横の区画は四声及び韻の区別を

示す。縦と横の組み合わせで、中国語の一つの音節を構成していた四つの要素、頭子音・韻・清濁・四声を明らかにするのである。一つ一つの音について分析的であると同時に、中国語の音韻の枠組みを示す総合的な図表でもあるのだ。その点「広韻」などが同じ音の字を網羅し、ただ列挙したのとは明らかに異なっている。

係り結びの法則の体系を、縦横の関係図表として書き著そうとした『紐鏡』では、宣長自身が「精細・精敏」と認めた『韻鏡』の四十三枚の図表に対し、結びの段を四十三段にしたために、齟齬が生じている。この点について、次に見てみたい。

四

『紐鏡』の「二転・三転」する結びが、全部で四十三段になったのは、偶然ではない。偶然ではない証拠の一つは、第四・五・四二・四三段の「にき」「てき」「なん」「てん」である。『詞の玉緒』の記事を挙げる。

ぬ ぬる ぬれ 第十九段

此ぬはいはゆる畢ぬ也。【ぬる も同じ。】萬葉に去字を書て。な にぬ ね とはたらく辭なり。そのよしは。な ン ば なで なまし ばばや などのな。又 にき けり にし じたり にけん などのに。又へきえねへたえねへ忘れぬなどのねなど。皆此ぬのはたらきたる辭にて。その言のつゞきにしがひて。な共に共ぬ共なるなり。【成といふ言につづきて其例を一ついはば。へなりなんへなりなばなどといへ

ばなどなる。へなりにきへなりなどにけりなどといへばにとなる。へなりぬといへばぬとなる。へなりねといへばねとなる。これをもて な にぬ ね 皆一つ辭なることをささとるべし。】さて此 な にぬ ね と。つ て と相雙ぶよし有り。次の つ の部にいへり。(後略)

つ つる つれ 第二下段

此つは上件ぬと相ならびて同意にて。かれは な にぬ ね とはたらき。これは つ て とはたらけり。さる故にか の な にぬ ね と。此 つ て とつねに相ならぶ也。【ぬとつとならび な にぬ とてならべり。】そはまづぬるとつるとならび、ぬれとつれとならび。ぬなりとつなりとならび。ぬべしとつべしとならび。ぬらんとつらんとならび。ぬらしとつらしとならべり。又なばとてばとならび、なんとてんとならび。なましとてましとならべり。又にきとてきとならび。にしとてしとならび。にけりとてけりとならべり。(後略)

(六之卷)

この説明を見ればわかるように、宣長は決して、「にき・にし」「てき・てし」「なん・なめ」「てん・てめ」が一語であるとは考えていない。「な・に」は「ぬ」の一活用形であり、「て」もまた「つ」の一活用形であると述べ、「き」「ん」については、第三段、第三九段で結びの一段として掲げた通り、単独でも用いられることを示している。しかも「ぬ」の項で、下に接続する語によって形が変化することを言っているのである。それをわざわざ、「にき」「てき」「な

ん「てん」を一語のように一段にあてているのはどう考えても肯けない。

例えば、係りに対する結びの形を重視した結果とも考えられなくはない。「ぬ」「つ」の結びの形は「ぬ・ぬる・ぬれ」「つ・つる・つれ」で、「な・に」や「て」は結びの形ではなく、他のことばへ続く形である。それならば、「き」「ん」以外の助動詞が接続することを指摘しながら、「にけり」「てけり」は一段を与えられず、「にき」「てき」が一段を占めているのはやはり納得できない。

矛盾の第二点は、第二二段の一音動詞の扱いである。「為・来・得・寝・経」の五語は、他の動詞の結びの扱いと明らかに異なっている。というのは、第二四段から第三二段までの二段動詞、及び、第三段から第三八段までの四段動詞の場合、活用する行ごとに結びの段を変え、五十音図の順に並べている。さらに、四段動詞十助動詞「り」を結びとした第十三段から第十八段でも、動詞の語尾の行に従って、「けり」「せり」「てり」「へり」「めり」「れり」と分けられているのである。ところが、一音動詞に限って、五語の活用する行が異なるにも関わらず、まとめて一段の中に入れてしまっているのである。何故なのだろうか。

その理由として、一音動詞五語では、活用する行が五行しかなく、五十音図全ての行に渡らないからではないか、と考へてみる。しかし、この理由は他の動詞の結びの段と比べてみれば間違っていることがわかる。

四段動詞の語尾十「り」、及び四段動詞では、ナ行・ワ行を欠き、同時にまた、二段動詞も含めてア行の結びを欠く。勿論これはそれぞれで活用する語がないためだが、他の動詞では、活用する語のな

い行をとばしても行ごとに結びの段を示しているのに、一音動詞では、活用する行の異なるものを一段としてまとめている。

一音動詞を「類」とした理由としては、「語幹と語尾の区別のできないものを、語幹と語尾をもつ一般の動詞と区別して、変種として一括したため」とする尾崎氏の指摘の方が説得力がある。しかも、変種たる理由としてもう一つ、これらの動詞は同じ行で同じように活用する他の語彙がない、ということも挙げられる。他の動詞の結びの段には、必ず用例として教語が挙げられている。こうした点も『紐鏡』の凶表としての完成度から、重要な要素だと思われる。

こうした変種の動詞を一段にまとめることが宣長の本来の意図であったと考へるのが妥当のように思われる。とすると、前に問題にした「にき」「てき」「なん」「てん」は結びの段数を四十三段にするために、持ち出されたものかもしれないと思われてくるのである。

もう一つ問題となるのは、助動詞「り」を単独では認めなかった点である。その結果、第八段のサ変動詞十「り」、第十三段から第十八段までの四段動詞十「り」が結びとして一段ずつを与えられている。『紐鏡』では、第十三段から第十八段の欄の右に次のような注がある。

此六段は第四の韻よりりるれとつゞきて留るなり万葉に此類の詞をば有字をそへて聞有成有立有とやうに書たり

『詞の玉緒』六之卷「むすび辭」では、頂度「り」の接続した部分の説明はない。その代わり、七之卷「文章の部」に、

同集歌のはし書

「ふるとしに春たちける日よめ」雪の木にふりかゝれるをよめ「歌奉れと仰せられし時よみて奉れ」梅花をりて人におくりける「此たぐひ。上にぞ」や「何」などの辭なければ。「よめり」奉れり「おくりけり」といふべき格なるを。りといはずして。皆るといふはいかにといふに。(後略)

「奉れり」を除けば、他は全て正しく「り」をとらえている。「紐鏡」の注記とあわせて、宣長が「り」の接続のしかたを把握していたことは間違いないと思う。但し、一語として認めるまでにはいたっていないかったかもしれない。『活用言の冊子』では、ラ変の活用を示した第六会のように、動詞の語尾に「り」の接続した形が見える。

さらに、『玉あられ』の「詞に三つのいひざまある事」で、終止形と「り」が接続した場合、「り」が接続した場合の意味の違いを述べているところでは、「咲ける」「ちれる」「ふれる」のように示しており、宣長は結局「り」を一語として、助動詞としては考えなかったと思われる。むしろ、ことばのきれつづきを考えていた『紐鏡』や「詞の玉緒」を執筆中の若い頃の方が、「り」を一語として扱おうとする気持ちが強かったかもしれない。「り」の扱いについては、『紐鏡』の注記がむしろ例外的で、宣長も迷った末に一語として扱うことはやめ接尾語のように扱うことにしたのであるまいか。『詞の玉緒』の「むすび辭」のところで、「り」について何も述べていない点に実は案外大きな意味があるように思われる。

しかも、『紐鏡』だけに限っていうならば、「り」を一語としてしまつと、結びの七段が不用になってしまうのである。が、結局宣長

は「り」を一語として単独で扱わなかったので、厳密には矛盾とは言えない。しかし、『紐鏡』『詞の玉緒』の記述だけを見るならば、「り」を認定しない方がおかしいように思われる。

「り」の問題は別にしても、一音動詞の扱い、「にき」「てき」「なん」「てん」の問題は、結びの数を四十三段にしようとした操作が行われたことを示すひとつの根拠となるであろう。

五

山田孝雄氏は『国語学史』の中で、宣長の係り結びの業績について次のように評価している。

係結の活用の研究の如きは主として従來のてにをは研究の成果を綜合し、之を活眼を以て觀察整頓せしものといふべく、(中略)しかも従來のてにをは研究がかかる絶大なる學說を生ぜしむるに至りしものは本居の人格の力にしてこの人にして、はじめてこの成績をあげ得たりといふべきなり。

私は、本居宣長の能力を過少評価するのでも、伝統的なてにをは研究を基礎として宣長の研究が完成したことを否定するのでも、ない。そうした点も踏まえて、宣長だからこそ完成させ得たのは、宣長が漢字音の研究と係り結びの研究を同時に行っていたからではないか、と思うのである。つまり、今日我々がもっている学問上の枠——漢字音は音韻の問題で、係り結びは文法の問題というようなもの——を、宣長にあてはめられないとすれば、見方を変えることによつ

て、宣長の語学上の業績が完成される過程は、更に新たに明らかにする部分があると思う。

註

* (一) この『排廬小船』の成立については、大久保正氏『排廬小船の成立』（藤女子大学国文学雑誌9）、岩田隆氏『排廬小船』の成立に関する私見（名古屋大学国語国文学15）、尾崎和光氏『排廬小船』は宝曆八、九年の作か（国語学史の基礎的研究 笠岡叢書）が詳しく論じている。在京中成稿説と帰郷後成稿説のどちらかという結論は未だ出ていない状態である。なお、宣長の帰郷は宝曆七年十月である。

* (二) 国語学大系に拠った。第十四巻所収。

* (三) * (二)に同じ。

* (四) 三之巻・四之巻・五之巻の内容を見ると、例えば、係りの辭の「は」は他に「動かぬ言にて結ぶは」「にはの意のは」「はも」「轉く添るは」など、伝統的な「てにをは」の記述、即ち、同音・同文字の「てにをは」の様々な意味・用法の違いごとに列挙している。

* (五) 大野普氏も『本居宣長全集』（筑摩書房）第五巻の解題で次のように指摘する。「では、宣長は何故係り結びの調査を遂行したか。私見によれば、宣長は、古文と宣長當時の言語との最大の相違点を、古文における係り結びの存在、宣長當時の言語における係り結びの不存在に見たのである。」

* (六) 『韻鏡』と『紐鏡』。「紐」という字自体、「婦納助紐字」として『韻鏡』の中に登場する。結びの「二転・三転」も『韻鏡』の「内転・外転」と関係がありそうである。

* (七) 『活用言の冊子』では、「得・寝・経」を第三公に、「為・米」を第二公に、「てにをは」を二分している。『詞の玉緒』でも「為・米」が変格活用であることに気付いている。「來はく共くる共結ぶ詞にて。（中略）へげんといふべき格なれども。（略）へになんとひいて。「此せは為の意也。（略）へ本あらの小秋しをれしぬらんなどあるしも為にて。しすせ」とはたらく同

じことば也。」ただ、係り結びの結びとしては、「得・寝・経」と同じように活用するので、一類としたのであろう。

* (八) 「てにをは紐鏡」の成立とその学説（国語学史の基礎的研究所収）

* (九) 稿のままで終わってしまったもので、田中道麻呂に協力を求めて完成させようとしていたらしい。道麻呂の死去した天明四年を成立の下限とする。全集第五巻の解題に拠った。なお、道麻呂が天明二年に書写したものが『御國詞活用抄』の全ての祖本である。

* (十) 寛政三年（一七九一）成立。宣長は六十二歳。翌年板成る。

* (十一) 時枝氏も中世以来の伝統が宣長のてにをは研究に色濃く流れているとする。「宣長が前期より繼承したてにをは研究なるものは、ほぼ中世來のそれであって、宣長はこれを承けて、更にこれを詳細に大成したので、その大綱に至っては中世のそれと大差ないものと認めてよい。」（『国語学史』）

* (十二) 宣長の著述は『本居宣長全集』（筑摩書房）から全て引用した。